清宗根付館 便り

今年も大学生への博物館実習を行いました。

博物館の学芸員資格取得を目指す実習生13名を対象として、8月31日（月）～9月11日（金）の2週間に、5日間の実習を2回にわたり受け入れました。学芸員業務や美術館運営について理解を深められる講義と、根付作品の展示や、お客様への解説を想定して実践してもらいました。最後は、学生達が自主的に考えた展示テーマで、企画展示を完成させました。学生自ら選んだ作品を、工夫を凝らしながら手書きの解説を付けて展示しています。ご来館の皆様、学生による企画展示もどうぞお楽しみ下さい。

数奇な運命に彩られた 現代根付の歩み

第五話 現代根付の転換期　異業種からの参入と新素材の活用

前回は1980年代には好景気を背景に牙彫の研鑽を積んだ作家たちが造形力を高めて、拡大期を迎えていたことを述べました。今回は90年代前半に起きたバブル崩壊とそれによって引き起こされた根付界の変化を見ていきます。

1990年代の大きな特徴は異業種の職人たちが根付界に参入してきたことです。背景には89年象牙やべっ甲などの国際取引の全面禁止されたことと91年のバブル経済の崩壊があります。90年代には宝飾や漆芸、ガラス工芸、外国からの作家らによって工芸技術を駆使したミニチュア的な精巧で再現性の高い作品が発表されました。さらに時流も「軽薄短小」へシフトしていったなか、言葉の連想や洒落などの情報価値も作品の重要な表現要素として根付にも活かされ、大衆性や娯楽性の側面を補強しました。象牙や黄楊などの従来の素材におさまらず、金や銀などの貴金属、宝石、アクリル樹脂、ガラス、漆、また海外からセイウチの化石、ヘラジカの角、マホガニー、タグアナッツ（象牙椰子）など多彩な素材が使われるようになり、新素材を活かす新規の技術導入が最先端となりました。また90年代は国内外での美術館での展覧会が開催され、94年には大英博物館、ロサンゼルス・カウンティ美術館、95年たばこと塩の博物館、96年渋谷松濤美術館、98年三島大社宝物館、2001年千葉市美術館で行われました。加えて94年にテレビ東京系列「極める 日本の美と心」で糟谷一空氏が出演、95年別冊太陽「印籠と根付」が出版されるなど複数のメディアでも取り上げられるようになったことで、今まで根付を知らなかった層までも目にする機会が増えていきました。

高木 喜峰「時の舟」オウム貝・金

2027年 1月～3月の特別企画展のご案内

日常に潜む幸福を再発見

『根付のしゃれ心』展

1月「根付とことわざ」展	■1月5日（火）～31日（日）
2月「禅と根付」展	■2月2日（火）～28日（日）
3月「粋な根付」展	■3月2日（火）～31日（水）

京都 清宗根付館　公式YouTube チャンネルを開設しました。今までの公式Twitter、Instagram でも、最新情報や作品画像を発信していますので、皆様のフォローをお待ちしています。

公式サイト

SAGAWA PRINTING

佐川印刷株式会社は印刷及び情報加工の分野でのリーディングカンパニーとして、日本文化の継承と美術の発展を目指し、京都 清宗根付館および清宗記念館を支援しています。

京都 清宗根付館 とは

当館は、佐川印刷株式会社 取締役名誉会長 木下宗昭による「日本のよき伝統を、日本人の手によって、日本に保管したい」という発意によって、ここ文化首都・京都に設立された、日本で唯一の根付を専門とする美術館です。当館では、「新たな挑戦」と「絆」をむね（宗）とし、根付と根付をめぐる文化の継承・創造・発展を目指し、<魅せる><育む><繋がる>を使命に、地域と皆さまに開かれた美術館として活動しています。

宗 現代根付 Contemporary Netsuke Newsletter Salon

AUTUMN ~ WINTER　Issue. 26

［目次］

■企画展の見所
■根付館便り
■現代根付の歴史

［発行元］
公益財団法人 清宗財団
〒604-8811 京都市中京区壬生賀陽御所町46番地（壬生寺東側）
電話 075（802）7000
www.netsukekan.jp/

日本で唯一の現代根付専門美術館　京都 清宗根付館『企画展』のご案内

根付作家が夢見た至高の根付たち
『百花繚乱！根付の世界』展

京都 清宗根付館では、根付の次世代の作家を育成することを目的に、毎年優れた発想と高い技法を備えた作品をノミネートし、最優秀作品にゴールデン根付アワードを授与しています。回を重ねるごとに作家たちは切磋琢磨し、技巧を凝らした作品を生み出すようになってきました。

根付は「粋と洒落の芸術」と形容されるように大衆文化の審美眼から育まれた大らかさと親しみやすさを備えています。生活に潤いを与える笑いや可笑しみをたたえ、悲しみにそっと寄り添う優しさを宿し、ときには明日への活力を与えてきました。そうした根付が秘める魅力を存分に発揮された作品が今年も集まりました。さまざまな作家たちが熟達した技巧を凝らした作品で競演する様子はまさに百花繚乱です。10月の企画展では、写実を超えてダイナミックな動きを感じさせる根付を特集します。

11月はゴールデン根付アワードのグランプリをはじめとして受賞作品とノミネート作品を一堂に集めて披露いたします。

12月は豊かな想像力から生み出される根付ならではの醍醐味を紹介いたします。

告知ポスター

2026年 10月～12月 企画展の見所 ※掲載の根付は原寸サイズです

10月 ■10月1日(木)～31日(土)

「躍動する根付」展

ダイナミックな動きを感じさせる根付には、ご覧になる方の直感に訴える魅力があります。日本美術では作品に気品や風格が生き生きと感じられることを「気韻生動」とされます。そこには主題を効果的に見せるために対象の配置や構図を何度も練りながら、主題に強弱をつけたり、大胆に省略や誇張をしたり、作り手の主観や意図を精緻な技術で浮かび上がらせようとしているのが見て取れます。単に写実的な描写にならないように、対象の本質に目を向けて、その本物が持つ「らしさ」を再現することで、リアリティを超えた新しい造形を生み出そうとしています。

森 哲郎（1960～）
「大森彦七と鬼女」 高4.7cm
黄楊

大森彦七は南北朝時代の武将で、楠木正成（くすのきまさしげ）軍を破ったことで知られる。その後正成の霊が鬼女となり襲うが、名刀の威徳で退治した。

及川 空観（1968～）
「夢流 無何有郷」 高4.5cm
象牙

川に飛び込んで魚を捕まえようとする少年と、水しぶきが様々な動物の精霊となって守護しているという作品。写実と空想が混然一体となっている。

糟谷 一空（1949～）
「牡丹」 高5.5cm
黒柿・水牛角

百花の王と称られる牡丹。他の追随を許さない技巧が光る作品で、わらぼっち（藁囲い）をかぶり、冬の寒さに耐える牡丹の凛とした気高さを表現。

齋藤 美洲（1943～）
「鷹」 高4.0cm 象牙

鷹狩の図柄は古典からある題材だが、根付らしい丸いフォルムに鷹と兎を配置している。諺「兎を見て鷹を放つ」は状況を見てから対策を講じるという意味。

東 声方（1936～）
「会心の技」 高4.4cm 黄楊

雌雄を決する大一番。日ごろから鍛えた力技の応酬で、観戦者も一喜一憂しながら見守るのを想像させる。最後は相手の隙をついて叩き込みで締めくくった。

11月 ■11月1日(日)～29日(日)

「秋の名品」展

年に一度行われる当館最大のイベント、ゴールデン根付アワード。この表彰は根付文化の継承を目的として、現代作家による自由で新たな挑戦を奨励するため、2014 年から毎年授賞式を開催しております。現代作家の新作の中から財団役員によって審査されグランプリを決定します。作家たちはグランプリを目指し、創意工夫を凝らし、新機軸を打ち出そうと意欲的に創作に取り組んでいます。時代を継承し、未来を見すえた挑戦を続ける作家たちの作品を紹介します。

※当館で展示された新作根付の中から総合的に優れた技術や発想を持つ作品に与えられる賞。

THE GOLDEN NETSUKE AWARDS グランプリ

栗田 元正（1976～）
「地獄太夫」 高3.3cm 鯨歯

室町時代の遊女で「現世の不幸は前世の戒行が拙いゆえ」と自ら地獄大夫と名乗り、衣には地獄を縫い、心は仏を唱え、口では風流の唄をうたったとされる。

THE GOLDEN NETSUKE AWARDS グランプリ

山本 伊多呂（1961～）
「本、出合い」 高5.1cm 黄楊

本とは未知との出会いである。遠く距離を隔てた異邦人であろうと過去の偉人であろうと書物という舟に載った言葉の連なりは時空を超えて届けられる。

優秀賞

高木 喜峰（1957～）
「A愛」 高3.5cm
鹿角・ハイブリットオパール・アルミ

驚異的な技術の進化を遂げているロボットがアダムの林檎に象徴される禁断の果実を持った未来とは？ロボットの顔は愛を象徴するハート型に。

理事長賞

黒岩 明（1949～）
「輝き」 高2.0cm
朝熊黄楊・漆・象牙

数万光年も彼方にある宇宙の銀河から地球を望むという壮大なテーマを根付のサイズにまとめている。さまざまな技巧が凝らされている。

特別賞

岡本 百々（1984～）
「ハマヌーン」 高5.5cm 鹿角

インド神話の猿神で、体の大きさを変えられ、様々な武器を持ち、空も飛べる万能の戦士であったことから、のちに孫悟空のモデルになったといわれている。

12月 ■12月1日(火)～27日(日)

「想像ふくらむ根付」展

変幻自在な発想や摩訶不思議な世界観と作家はどう向き合うのか、どう造形にまとめるか。そこには根付ならではの「ひねり」と呼ばれる、自由な表現と斬新な解釈が垣間見えて、それぞれの作家の個性が光ります。脈略のない、幾つかのモチーフを組み合わせたり、現実にはあり得ない形や設定にしてみたり、言葉の意味を分解したりして非日常の情景を作品に与え、見る側に新鮮な驚きと発見をもたらします。今月は作家の豊かな想像によって生み出された機略に満ちた根付と、根付をご覧になった方が想像を膨らます情緒的な根付作品を特集します。

人見 狛（1985～）
「無茶ブル」 高3.2cm
鹿角・真弓・べっ甲

ブルドッグはもともと雄牛（ブル）と闘わせるために開発された、勇猛な犬であるが、獲物の方が一枚上手だったもよう。木の穴に無茶に入って万事休す。

宮澤 彩（1949～）
「猫の口上」高2.6cm 象牙

歌川国芳の浮世絵「流行猫の狂言づくし」に登場する、口上を述べる猫。裃には「猫に小判」から小判の柄。着物の紋には足跡といった凝りよう。

田神 十志（1957～）
「おしくらまんじゅう」 高4.5cm
象牙

「おしくらまんじゅう押されて泣くな」の掛け声を響かせながら、子供たちが背中やお尻を押し合って、外に出されたら負けとなる遊び。懐かしい冬の風物詩。

向田 陽佳（1968～）
「胡蝶」 高4.6cm
黄楊・アワビ貝

胡蝶は蝶の美称で、作品では美しい蝶の精霊にいる。アワビ貝の遊色効果で蝶の羽を表現。髪は蝶の特徴的な渦巻き状の口吻（こうふん）を思わせる。

佐々木 裕（1971～）
「猫に櫛」 高4.0cm 象牙

猫は櫛で梳かれるのは好きではないらしい。猫の耳は警戒心や恐れを抱いた時の「イカ耳」になっている。愛猫家の作者ならではの観察から生まれた作品。